

第17回 34歩く会

平成28年4月9日(土)



## 玉川上水と酒蔵を巡る



羽村の堰から田村酒蔵と石川酒蔵へ

玉川上水は、羽村の取水堰（標高128m）を起点に、四谷大木戸（標高32m）まで続きます。江戸の飲料水として、玉川兄弟が2度の失敗を乗り越え、資材を投じて1653年4月4日に着工して、11月15日に完成し、翌年から江戸市中への通水が開始されました。

34歩く会では4年前に、東大和市から玉川上水を遡り羽村の堰を目指しましたが、田村酒蔵までしか歩けませんでした。そこで、今回はリベンジとして、玉川上水を起点の羽村の堰から田村酒蔵まで歩き、更に石川酒蔵まで辿るウォーキングです。

今回は、JRの羽村駅に集合です。駅から500mほど下ると羽村の堰に出ます。羽村の堰は、多摩川を大きな石を積み上げ、また木造の堰で堰き止めた水を、取水口から玉川上水に取り込んでいます。取り込まれた水は、近くの第3水門から一部が村山貯水池や狭山湖に送られ、残りは玉川上水を流れて東村山浄水場に送られています。羽村の堰の周辺には、運が良ければまだ桜の花が見られるかも…極彩色のチューリップ畠も見られるかも…

羽村の堰には江戸時代に江戸の四谷まで水路を造成した多摩川兄弟の銅像が建っており、対岸の博物館には羽村の堰や玉川上水の歴史や資料が沢山展示されております。

羽村の堰からは、玉川上水に沿って歩き、前回のゴール地点の田村酒蔵に立ち寄ります。田村酒造では工場見学（14時に予約済）と日本酒党には人気の酒（「嘉泉」）の試飲をしたいと思います。

「田村酒蔵」は文政5年（1822）創業で、奥多摩伏流水からわき出る水（嘉き水）が仕込み水です。「田村酒蔵」からは多摩川の土手に沿って進み、「石川酒蔵」を訪問します。「石川酒蔵」は「多摩自慢」で知られている酒蔵で、日本のビールの草分け的存在でもあります。古い建物を利用したレストランも経営しており、作りたての「地ビール」も味わえます。

ここから拝島駅までは15分ほどですので、ここで一時解散としますが、レストランで「多摩自慢」や「地ビール」で乾杯しましょう！ レストランにはソバ処やイタリアンもありますよ。

「石川酒蔵」からは拝島駅に出て、西武線で東大和に戻ります。（歩程距離：約7km）

1. 開催日： 平成28年4月9日(土) 10時集合
2. 集合場所： JR青梅線；羽村駅（南口）
3. 歩行コース； (ト)はトイレ

JR羽村駅(ト)→チューリップ畠→羽村の堰→羽村博物館(ト)→羽村の堰(昼食)→

10:00 10:30 10:45 11:30 12:00 12:15 12:45



田村酒蔵(ト)→多摩川遊歩道→石川酒蔵(ト)(一時解散)→拝島駅(ト)→東大和市駅

14:00 15:00 16:00 16:20 17:00

4. 注意事項：

- ①小雨決行です。
- ②昼食は、羽村駅付近で購入が可能ですが、前もってご用意しておくことをお勧めします。

**嘉泉** 文政五年創業  
田村酒造場

Tanikawa Brewery Co., Ltd. 自多端  
石川酒造株式会社 優品

## 「玉川上水と酒蔵を巡る」歩行記

今回は、4年前に東大和から玉川上水を遡り羽村の堰を目指したが、田村酒造までしか歩けなかつたウォーキングのリベンジもある。

### [羽村駅]

今日は土曜日で晴天だ。拝島駅からホリデー快速で9:15にJR羽村駅に到着。駅前には地元の人々が山車を組み立てている。今日は羽村の春の祭の日で、午後にはこの駅前に市内の山車が集結して、賑やかになるということだ。

駅周辺を一回りしてみると、増田さんが笑顔で御挨拶。その後、次々と仲間が集結する。今回の集合場所は東大和ではなく、羽村なので参加者が少ないと心配していたが、天気も良く、皆さん元気に顔を合わせる。集合時間の15分前、いつも参加しているNさん達が拝島で五日市線に乗ってしまい、秋川方面に行ってしまったとの連絡が入る。五日市線は本数が少ないが、直ぐに拝島に戻り青梅線で羽村に向うよう連絡。

本日の案内には「拝島駅南口」集合としたが、羽村駅には南口は無く「西口」であるため、戸惑った人もいたようで、申し訳ない!

集合時間の10時を過ぎたので、ひとまず全員集合し、本日の予定コースと次回の予定を説明し、集合写真を撮る。10:15頃、秋川方面に行ってしまったNさん達が到着、19名になった。再び全員で集合写真を撮り、いざ出発。(10:20) 駅前の道端にはチューリップが満開だ。

羽村駅からは、しばらく道幅が狭い歩道を進む。途中には桜の大木があり、桜が満開で見事な眺めで、そよ風にチラホラ散り始めている。やがて旧奥多摩街道に出ると、信号の向う側の玉川神社には人がたくさん集まっている。ここでも今日の祭のために山車を組み立てているところだ。鮮やかな色彩の神輿も出されており、大きな幟も準備している。(10:40) そんな中を我々の仲間は神社の本殿に行き、参拝をする。そして祭の準備をしている人達の話を聞く。

神社から奥多摩街道を200mほど進み、左に折れて坂を下ると、眼下にチューリップ畠が広がっており、仲間達から歓声が湧く。「根がらみ田のチューリップ畠」だ。(10:50)

### [チューチップ畠]

ここには元々水田が広がっていたが、休耕田が増えてきたので、町興しのために20年ほど前からチューリップを植えている。

チューリップはいろいろな種類が植えられており、種類別に、また色別に整然と植えられている。そんなチューリップ畠の間の畦道を歩き、広大なチューリップ畠の中心部に出る。舞台もあり、飲食物や地元の特産品などを売るテントが軒を連ねている。地元の話好きの人がチューリップや当地の事などを熱く語り、話が尽きない。チューリップ畠の中に入り集合写真を撮る。ヒヤシンス畠もあり、その鮮やかな青紫色が広がっている。

チューリップ畠の脇には水路があり、勢いよく水が流れしており、大きな水車が回っている。この田で獲れた米を精米していたのだろう。水路の下流には小型の二連水車があり、カワユイ! 水路の中には沢山の小魚が泳いでいるのが見える。

その水路の先には、今朝出遅れた伊西さんが来ており、再会を祝す。(11:05)

チューリップ畠からは多摩川の土手に上がる。この土手には大きな桜が並木になっており、時々川面からの風で花吹雪になっており、思わず歓声が上がる。桜並木の土手の向うには「羽村の堰」が見え、対岸には「羽村博物館」の三角屋根が新緑の中に見える。

羽村の堰に着くと、普段は立入禁止の取水門の上が、今日は特別に通行できた。取水門の上には水道局の係員がおり、安全管理をしている。水門の上から羽村の堰や玉川上水を覗き込む。

江戸時代に玉川上水を造った玉川兄弟の銅像の前の休憩所で遅れた人を待ち全員集合。(11:25) 午後1時に再集合して出発するまでここで自由時間とする。 桜の下や河原を散策したり、対岸の羽村博物館に行っても良い。

#### [羽村博物館]

ほぼ全員が歩行者専用の素敵な橋を渡り、対岸に向かう。橋の上からは羽村の堰の全容が見渡せる。川原には青鷺が魚を狙っている。対岸の土手には多摩川の河口から54kmの道標がある。

「羽村博物館」は極めて立派な建物だ。(11:40) 受付で入場記帳をして「入場料は?」と聞くと「無料です!」とのこと。 羽村町には工業団地などがあり、財政が豊かだからかな・・・館内には羽村の堰や玉川上水などについて、歴史や成り立ちや工事の状況などの詳細な展示があり、興味深く仲間同士で議論もしてお勉強!

玉川上水は360年も前の江戸時代の1653年に、現在のような測量技術も無く、動力や重機もない時代に、約9ヶ月という短期間で手作りで、羽村から江戸の四谷までの43kmを完成させたのだから驚きだ。 その水路の途中には小山や谷などの凹凸があり、川もあったのに、いくつかの段丘を這い上るるようにして、標高差僅か92mを、うまく水が流れ下ったのだから凄い! 当時は、夜、提灯を並べて高低差を測量して造ったのだ。

館内の奥の方には、羽村の農村時代の道具などが展示されている。 養蚕の道具などもあり、我々も子供の頃にカイコの幼虫の世話を手伝わされ、幼虫をつまむのが嫌だった思い出など、話が盛り上がり、なかなか先に進まない。

隣の部屋には、昔懐かしい五月人形が何体も飾られている。鎧兜や桃太郎人形など、懐かしい。

博物館の建物の屋外には、昔の民家が移築されている。中に入ると説明員が居り、囲炉裏には火が燃えている。土間には「へっつい」(カマド)があり、釜がかかっている。お勝手には水瓶があり、ここでも我々の子供の頃の話で盛り上がり、時間を忘れる。

子供の頃の話は尽きないので、博物館を出る。(12:15) 古民家に立ち寄らなかった人たちは、もう羽村の堰の方に向っており、誰もいない。 博物館を出たところで、Kさんが前のめりに転んでしまった。 小さな突起に躓いてしまったようだ。口から血が出て痛々しいが、矢沢さんの介護もあって、大事に至らず、なんとか歩けそうだ。伊澤さんからマスクを頂き、応急処置。

再び歩行者専用橋を渡り、羽村の堰に戻ると、先着の人達は河原でお弁当を広げている。 何と、男性組と、女性組に分かれて座っているではないか!(12:35)

#### [お弁当]

広々とした河原を眺め、堰からの水の流れ、川面からの爽やかな風を受け、さらに上を見ると青空に満開の桜。なんとも贅沢な昼食だ! Nさんからの柏餅やイモガラの煮付けのお裾分けが回ってくる。柏餅は柏の葉の香りが何とも言えない。イモガラは椎茸などが入っており、我が家でも時々食べる私の好物だ! お弁当を食べる間も、お互いの話が尽きない。

1時になり、再出発。 玉川上水の桜並木の下に入ると、両側には屋台店が軒を並べており、美味しそうな匂いも漂っている。 物凄い人の波で、なかなか先に進めない。「足湯」のコーナーもあり、Hさんは先程ここに入り、温まってリフレッシュしたという。

また、沢山の人垣が出来ているところがあり、中を覗くと「猿回し」をやっている。何となく見ていると時間が経ってしまうので、先に進む。 屋台店の一帯を過ぎると、玉川上水の第3水門の分水場があり、かなりの水量が左側に分かれトンネルに入って行く。 この水は、米軍横田飛行場の下を通り、かたくりの湯の付近を通り、我々が数年前に歩いたトロッコのトンネルの下を通り、多摩湖に注がれているのだ。 残りの水は、本来の玉川上水を東村山の浄水場へと流れている。 この第3水門の水面には、桜の花びらが流れ集まり、水面がピンク色のジュークンのようだ。 第3水門から先の遊歩道は、人通りが少なく、静かで、気持ち良く歩ける。

桜並木の先には、玉川上水に沿って遊歩道が雑木林の中の小路のように伸びており、新緑に包まれて気持ち良く歩く。 新堀橋を過ぎると、河岸段丘の上に出て、多摩川は右下の方になり、やがて宮本橋に出る。(13:30)

ここを右に折れると、次の目的地である「田村酒造」の白く長い塀と工場の屋根と煙突が見える。「田村酒造」の工場見学の予約時間は2時であり、ここまで順調に歩いてきたので、まだ20分ほど時間があるので、酒蔵とは道を挟んだ隣にある大きな寺院「長徳寺」に寄ってみる。この寺は最近改装したようで、大きな本堂と庫裏、立派な山門があり、境内も良く整備されている。広い境内の中央には大きな円が描かれており、その周辺には水道の止水弁が沢山備えられている。寺の行事や何かのイベントに使うのだろうか、火渡り式かしら。

この寺は多摩川の北側の河岸段丘の上にあるので、多摩川の対岸まで見渡せ、対岸の新緑が煙のように見える。山門の脇を抜け、道路の反対側の「田村酒造」に向う。(13:40)

#### 【田村酒造】

「田村酒造」は白く高い塀に囲まれており、門を入ると左側には大きな工場の建物があり、その上には煉瓦造りの大きな煙突が見え、その背後には櫛の大木が見える。事務所で予約してあつた工場見学の案内をお願いすると、他に3名の方の予約があり、まだ来てないのでそれまで少し待ってほしいとのこと。そこで、酒蔵の敷地内を散策する。趣のある大きな本宅があり、その前庭は芝生になっている。池もあり良く手入れされた植木が沢山あり、大きな赤松の木が立派だ。

やがて親子3人組が到着し、案内の方が工場入り口の前で説明。(14:00) 田村家は1600年代に福生村を切り開いた旧家で、1822年から酒造業を興したなど、酒蔵の歴史などの説明がある。工場の前の大きな「杉玉」は「酒ばやし」とも言い、秋に新酒が出来た時に造るそうで、2トントラック1台分の杉の枝を使い、少しづつ束ねたものを集めて造り、出来たては緑色だそうだ。

この「田村酒造」には、3日後に天皇陛下御夫妻が行幸され、工場見学される予定とのことで、我々はその直前の見学で、運が良かった！ 陛下の行幸のために、場内外をきれいに掃除し、整備しているとのこと。本日の午前中には、陛下の行幸に備えて女性従業員が皇后陛下の役になり、リハーサルも行ったとのこと。(4月13日付の読売新聞には、天皇陛下の「田村酒造」などへの行幸が写真入りで報道されている)

工場内に入り、靴を草履に履き替えて、内部を見学する。工場の建物は創建以来のもので、木造であり、天井が高く、大きい。入口を入ってすぐ右手には、この酒蔵のシンボルでもある創建当時の煉瓦造りの煙突がある。工場の第一の蔵は、酒の原料である米を蒸すところだ。大きな自動蒸し器の他に、大きな釜のマニュアル蒸し器もある。原料の米は「山田錦」などであり、原料米を35%近くまで削って「大吟醸」を製造するそうだ。天皇陛下のために、その見本も置いてあるので見せていただく。

第二の蔵は、金属製の酒の醸酵タンクが林立している。第三の蔵は、大吟醸用に特別に温度管理などをしているタンクや、熟成タンクが並んでいる。

工場を出て、工場の東脇に行くと、屋根がかかったコンクリート製の大きな井戸がある。酒造りに使用される酒の命とも言うべき水の源だ。創建当時、敷地内に何箇所か井戸を掘ったが、大きな櫛の脇のこの地に、奥多摩伏流水から湧き出た、水質、水量ともに優れた水脈が見つかり、「嘉き泉」ということで、酒の名前を「嘉泉」にしたそうだ。

次に本宅の方を見学する。本宅の入口には白い布の覆われた階段がある。天皇陛下は靴を脱ぐところを一般の人に見せないために、靴のままこの階段を上がり、中に入ってから靴を脱ぐのそうだ。木戸を入り、天皇陛下がお休みになる奥座敷を外から見せていただく。

奥座敷の庭には大きな櫛の木が聳える。樹齢1000年と言われているそうだ。  
木からパワーを頂くために、皆で木に触り、木を取り囲む。

本宅の入口にはザクロの老木もあり、価値のある木のようだ。  
本宅の前庭に回ると、2人の男女が本宅のガラスなどを磨いている。天皇陛下の行幸のために綺麗にしているということなどと話をする。

前庭を横切り、玉川上水の分水場に出る。田村家は、砂川の砂川家と共に玉川上水の分水を許された数少ない家だ。この分水で水車を回し、酒米を精米していたのだ。現在では水車の建物は残されているが水車は回っていない。酒米は精米したものを購入して使用しているそうだ。当時、名主であった田村家では、この水を利用して周辺の水田を開拓していったのだ。

田村家専用の木戸を開けると、玉川上水の土手に出る。玉川上水には豊富な水が流れしており、明治初期には船が江戸と行き来しており、ここが停船場でもあった。しかし、水質の悪化と江戸への船便は下流に向うので良いが、江戸からの帰りは流れに遡るので大変で、岸から綱で引張つたりしたそうで、2年ほどで船便は廃止になったそうだ。ここには玉川上水からの分水弁がある。

工場の別棟で「嘉泉」の吟醸酒などを試飲させていただく。お土産に酒や酒粕などを購入し、ザックに詰め込む。酒造の人達は、酒粕を焼いて酒の肴にしていたという。吟醸酒などの試飲でホロ酔いになり、良い気分になったところで再出発。(15:15)

#### 【多摩川堤の桜並木】

田村酒造の裏門から出て直ぐに多摩川の土手の遊歩道に出る。ここにも満開の桜並木が続いている。川面からの爽快な風を受けて快適に歩を進める。

多摩橋を過ぎたところから五日市線の鉄橋までの間は、広大な河川敷公園「多摩川中央公園」になっており、桜並木の土手と多摩川の間には緑の芝生が広がっており、この芝生の上を歩くと、程良い弾力が伝わってきて気持ちがよい。

五日市線の鉄橋を潜り、土手に登ると、見事な桜並木が延々と続いており見事！歓声が湧く。ここで一休み。時折、多摩川からの風で、満開の桜の花吹雪が舞い来る。(15:50)

再び1km程もある桜並木の下を気持ち良く歩き、睦橋の下を潜り、「福生南公園」に出る。この辺りに来ると、今日は気温が高く、長距離を歩いてきたのでバテ気味で、歩行の遅れる人もいるので、一旦休憩して全員集合。(16:10)

公園の脇の、玉川上水の分水の流れに沿って進み、小橋を渡って高台に登ると、間もなく「石川酒造」に到着。(16:25)

#### 【石川酒造】

「石川酒造」は、1863年の創業で、田村酒造と共に歴史のある酒造で、「多摩自慢」という名の日本酒で有名だ。また日本のビールの草分け的な存在もある。石川酒造では、到着時間が予定できなかったので、工場見学は予約していなかったので、自由に敷地内を散策した。「石川家の櫻」という大きな櫻の木があり、その脇には直径3mもある大釜が展示されており、創業当時にビール用の麦を蒸すのに使用されていたという。

石川酒造には日本酒の他に「地ビール」も製造しており、「ビール工房」の建物（入場禁止だった）もある。今度ゆっくり地ビールも味わいたいものだ。建物の前には真っ赤なスバルサンバーが展示されている。

敷地内にはレストランもあり、日本料理の建物とイタリアンの建物がある。ここで親睦会をやりたかったが、今日は団体や予約があるようで満席だった。売店を覗き、工場の前で集合写真を撮った後、拝島駅に向って出発。(16:35)

国道20号線を超えて、拝島駅には17:00に到着し、ここで解散！（歩数は約24000歩）駅前の「庄屋」で懇親会をして、大いに盛り上がった。

次回は、10月22日に、東大和市駅からコスモスの昭和記念公園を巡る。